

# 日韓の「中途終了文」の丁寧さについて

## —断わる場面を中心として—

元 智恩

キーワード：中途終了文、丁寧度、使用頻度

### 1. はじめに

日本語と韓国語には、文を最後まで言わずに、途中で文を終え、残りは相手の判断に委ねるといった表現が多く見られる。日本語では、ノデ、カラ、ケド、ガなどの接続助詞で終わる文、韓国語では、는데 거든などの連結語尾で終わる文、動詞・形容詞の「テ」形で終わる文、チョット、アマリ、췌, 그다지などの副詞で終わる文がある。例えば、誘いに対する断りとして (1) (2) (3) (4) のような文が多く用いられる。

- (1) すいません。水曜日はアルバイトがありますので。
- (2) ごめん。今日はこの後用事があるから。
- (3) 그날은 불일이 있는데. (その日は用事があるけど。)
- (4) 미안 아르바이트가 있어서. (ごめん、アルバイトがあつて。)

本稿では、このような文を「中途終了文」として取り上げ、断る場面における日韓両言語の「中途終了文」の異同を明らかにすることを目的とする。実際には、質問紙調査によって両言語の「中途終了文」を分類し、場面別の使用頻度と丁寧度を調べる。

### 2. 先行研究

## 2.1 省略に関する先行研究

久野(1978)では、「主語」・「目的語」の省略というように、構文法的な条件を基盤に研究されていた省略現象について、談話文法の観点から論じられている。各構成要素の表す情報の復元可能性<sup>1</sup>や情報の新旧の度合<sup>2</sup>に重点を置き、省略について考察している。金(1998)は、(韓国語の)「省略」とは深層構造にあるべきものとして想定される成分が表面構造には表われない言語現象と定義した上で、その条件として「形態的同一性」、「指示的同一性」、「構造的同一性」があることを明らかにしている。両方とも情報の復元可能性を省略の前提条件としている点では同じ立場をとっていると言えよう。

## 2.2 日本語学習者の発話する「中途終了文」に関する研究

水谷(1991)は、言語に現れる丁寧さについて、日本語と英語で特徴的に異なるものの一つとして、「文末の省略」を挙げている。例えば、日本人は依頼を断る際に、「ちょっと用がありますので…」と言うだけで済ませ、「失礼します」まで言わない。それに対して、英語話者の意識では、丁寧な話し方は完全文、しかも一定の長さを持つ文が好ましいという考え方があり、従って日本語で話す時も「完全文」が丁寧であると感じるという。また、生駒・志村(1993)では、日本語母語話者は文を途中で切るにより、直接的な断りを避ける傾向があり、特に自分より地位の高い人への断りに多く使われるとしている。これに対して、アメリカ人日本語学習者はこの傾向がわずかな程度であると述べている。さらに、志村(1993)では、断りとして用いられた「中途終了文」の半分以上が地位の上の人に使われており、大半が断りという発話行為の最後に使われているとしている。また、中途終了文はその大半が「言訳・理由」として使われ、{「言訳・理由」+動詞の「て/で」型}という構造を持つものが最も多いとしている。

## 2.3 接続助詞で終わる「中途終了文」に関する先行研究

白川(1990)は、「テ形」による言いさしの文について取り上げ、言い切りの形式では表すことができない感情が主節が省略されることで表されているのであり、言い切りの形式の文とは一線を

画するものと述べている。白川(1992)では、「カラ」で言いさす文について取り上げ、終助詞的な「カラ」には「相手に新情報を言い渡す+ソノコトヲ、承知シテオイテクダサイ」といった表現効果があるという。

福田(1994)は「けれども」で言いさす文を、1.倒置、2.後件、3.終助詞的用法、4.その他の4つに分類し、それぞれの談話的特徴を述べている。この中で特に、3.終助詞的用法に重点を置いて考察している。「けれども」文の終助詞的用法とは、形態的には省略されているにもかかわらず、相手に対して、何らかの働きかけの機能を持つような用法のことである。これをさらに、①相手伺い用法、②断定回避用法、③反実用法、④反論用法、⑤その他に分類している。

一方、南(1999)では、現代韓国語の「거든」(geodeun)の基本的な意味と、副次的な意味を取り上げ、接続語尾として使われる場合、その基本的な意味は「仮定的条件」であり、終結語尾として使われる場合、その副次的な意味は「状況提示」であるとしている。朴(1998)でも、現代韓国語の終結語尾である「거든」(geodeun)を取り上げ、「거든」(geodeun)は聞き手にとって未知の事実を知らせるということ为前提としており、話し手がすでに内面化した情報に限って使われるという特徴があるとしている。

### 3. 本研究の立場と調査の概要

#### 3.1 本研究の立場

久野(1978)、金(1998)は談話文法の観点から、情報の復元可能性と情報の新旧の度合を前提条件とした省略現象を考察している。しかしながら、日常の言葉づかいを考えると、情報の復元可能性や情報の新旧の度合を前提条件とした省略が行われない場合もしばしば見られる。例えば、誘いに対する断りとして使われる、接続助詞で終わる文を取り上げる。

- (5) a. 水曜日の勉強会に参加しませんか。
- b. その日は都合が悪いので。

(5) b の述部には「行けません」、「だめです」という「不可」の意味が省略されていると思われる。これは前の文である a から復元できない情報である。「その日は都合が悪い」ということと、「不可」ということはいずれも聞き手にとっては新情報であり、後者の方がより重要度が高い情報であるにもかかわらず、省略されている。(5) b のような省略は情報の復元可能性、情報の新旧の度合とは違う動機によって行われているのではなかろうか。その動機とは、相手の誘いに応じられないという旨を直接的に示すことを避けることであって、丁寧さと関わりがあるのではないだろうか。水谷(1991)、生駒・志村(1993)などでは、日本語の「中途終了文」と丁寧さとの関わりについて触れているが、実態調査は少ない。なお、日本語と韓国語における「中途終了文」については、今まで研究の対象とされてこなかった。そして、接続助詞で終わる「言いさしの文」の談話における機能を中心に考察した研究—白川(1990)(1994)、福田(1994)、南(1999)、朴(1998)など—では、形式を中心に、一つの接続助詞で終わる文(例えば、「カラ」で終わる文、「ケレドモ」で終わる文)の談話における全般的な機能を考察しているが、一つの場面における「中途終了文」については関心の対象とされていないようである。「中途終了文」に関しては語用論と関わる部分が多い<sup>3</sup>と思われるので、対照研究を行う場合、一つの場面を中心に行った方が等価となる対象を想定するのに容易であろう。

そこで、本研究では、「断わる場面」における日韓の「中途終了文」の異同について考察する。ここで扱う「中途終了文」とは、形式的には主節、又は述部が省略され、接続助詞(連結語尾)や動詞・形容詞のテ形や名詞・副詞で終わっている文であり、機能的には、直接的な断りを避けるものであると考える。倒置や情報の繰り返しを避けるための省略文は考察の対象にしない。

### 3. 2 調査<sup>4</sup>の概要

調査の方法は質問紙調査によって行った。調査内容は断り表現の使用実態(自由応答式)および丁寧度の調査(多肢選択式)の二つである。「断り表現の使用実態」の調査から、「中途終了文」を分類し、各場面における使用頻度を調べる。「断り表現の丁寧度」の調査から、「中途終了文」の丁寧度を考察する。本稿では、調査結果の中で、特に「中途終了文」についての調査結果を中

心に考察する。

#### 調査 1. 断り表現の使用実態の調査（自由応答式）

相手との親疎関係、地位の高低関係、身内対他人の関係を考慮し、「なんとなくやりたくない」という理由で断る以下の五つの場面を設定し、状況に応じて自分が断る立場だった場合、どのように言うかを記述してもらった。①指導教官(親の目上)の勉強会の誘い、②同じ学科の教官(疎の目上)の勉強会の誘い、③親のお見合いの誘い、④親しい友達からの飲みに行く誘い、⑤親しくない友達からの飲みに行く誘い

#### 調査 2. 断り表現の丁寧度の調査（多肢選択式）

多肢選択式の質問項目は、以下の a~l までの 12 個の表現について被験者に 5 段階の丁寧度をつけてもらった。5 段階とは 1=最も気楽な態度の時使う表現、2=やや気楽な態度の時使う表現、3=どちらともいいがたい態度の時使う表現、4=やや改まった態度の時使う表現、5=最も改まった態度の時使う表現である。二つの場面(1)教授から勉強会に誘われる場面、(2)友達から飲みに行くことを誘われる場面を設定した。この二つの場面(1)(2)において普段使わないと思う表現があれば、線で消してもらった。各表現について説明すると、a, d, i, k は、文末表現のついていない「断定形」である。日本語の b, c, h, j は文末形式「のだ」のついている表現であり、韓国語の b, c, h, j は「のだ」の類似表現「것이다」(kesita)のついている形にしている。日本語の e, l は推量の文末形式「ようだ」、「みたいだ」のついている表現であり、韓国語の e, l はその類似表現である「것 같다」(keos katha)のついている表現である。f, g は「中途終了文」である。f を韓国語に訳するとき、尊敬の終結補助詞「요」(yo)<sup>5</sup>のついている形にした。また g はそれがついていない形にした。f, g 以外の文は完全文<sup>6</sup>である。

#### **日本語の多肢選択肢**

- a. すみません、バイトが入っているので、無理です。
- b. すみません、バイトが入っているので、無理なんです。
- c. ごめん、バイトが入っているので、無理なんだ。
- d. ごめん、バイトが入っているので、無理だ。

- e. すみません、バイトが入っているので無理のようです。
- f. すみません、バイトが入っていますので。
- g. ごめん、バイトが入っているので。
- h. すみません、バイトが入っているんです。
- i. すみません、バイトが入っています。
- j. ごめん、バイトが入っているんだ。
- k. ごめん、バイトが入っている。
- l. ごめん、バイトが入っているので、無理みたい。

#### 韓国語の多肢選択肢

- a. 죄송합니다 아르바이트가 있어서 무리입니다.
- b. 죄송합니다 아르바이트가 있어서 무리인겁니다
- c. 미안 아르바이트가 있어서 무리인거다
- d. 미안 아르바이트가 있어서 무리다
- e. 죄송합니다 아르바이트가 있어서 무리인 것 같습니다
- f. 죄송합니다 아르바이트가 있어서요
- g. 미안 아르바이트가 있어서
- h. 죄송합니다 아르바이트가 있는겁니다
- i. 죄송합니다 아르바이트가 있습니다
- j. 미안 아르바이트가 있는거다
- k. 미안 아르바이트가 있다
- l. 미안 아르바이트가 있어서 무리인 것 같다

## 4. 調査結果の分析

調査内容は断り表現の使用実態（自由応答式）および丁寧度の調査（多肢選択式）の二つである。「断り表現の使用実態」の調査から、「中途終了文」を分類し、各場面における使用頻度を調

べる。「断り表現の丁寧度」の調査から、「中途終了文」の丁寧度を考察する。

#### 4.1 「断り表現の使用実態」

##### 4.1.1 「中途終了文」の分類

自由応答式の調査結果からまず、形式を中心に分類すると、接続助詞（連結語尾）で終わる文、副詞で終わる文、その他のように大きく三つに分けられる。

ところが、カラ、ノデなどの接続助詞で終わる文と、タラなどの条件形で終わる文は、同じく接続助詞で終わっていると言えども機能面では違いが見られる。例えば、

(6)a. 今日は都合が悪いから。

b. ○○ちゃんとか誘って見たら？

(6)a は「弁明」の機能が表れ、(6)b は「代案の提示」となると思われる。従って、形式と機能という二つの側面から分類を行う必要がある。下記の表 1 では、形式面においては接続助詞（連結語尾）で終わる文、副詞で終わる文、その他という三つに分けている。機能的な側面から「弁明」と「代案の提示」と二つに分けている。これは「中途終了文」を形式と機能の両面から捉えている本研究の立場に通じるものである。大枠を示すと以下の通りである。

表 1 日韓の「中途終了文」の分類

形式的側面からの分類	機能的側面からの分類	
	弁明	代案の提示
接続助詞で終わる文 連結語尾で終わる文	ノデ、カラ、ケド、シ	タラ
副詞で終わる文	チョット、アマリ	
その他	(主格助詞) 가	(主格助詞) 이

##### 4.1.2 「中途終了文」の使用頻度

自由に記入された文の総和における「中途終了文」の占める割合を調べてみた。表 2

では、「中途終了文」の総数／全文の総和が示されており、その右には%が示されている。

表2 全文における「中途終了文」の割合

	場面(1)		場面(2)		場面(3)		場面(4)		場面(5)	
日本	65/ 227	28.9%	73/ 214	34.1%	43/ 178	23.9%	75/ 265	28%	64/ 264	24%
韓国	92/ 325	28.3%	76/ 281	26.8%	59/ 281	20.2%	101/ 377	23.1%	112/ 354	31.6%

#### 4.2 「断り表現の丁寧度」

a から l までの選択肢の中で、回答頻度 5%以上の表現を取り上げ、5段階の丁寧度の平均値と、その分布を求めた。f、g は「中途終了文」であり、その他の表現は完全文である。

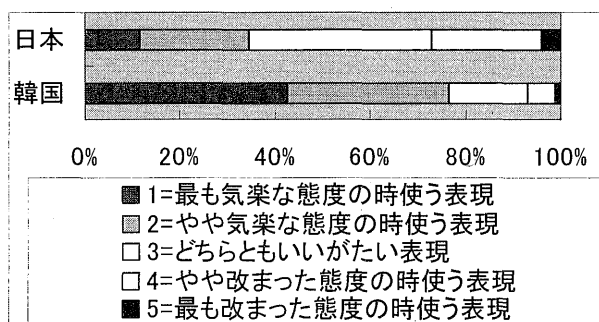
##### 4.2.1 教授に対する場面

表3 各表現の丁寧度の平均値

		a	b	e	f	h	i
日本	丁寧度	3.649	3.652	4.469	<b>3.604</b>	3.266	3.076
韓国	丁寧度	4.131	4.5	4.615	<b>2.991</b>	3.584	3.639

このうち、「中途終了文」fの丁寧度の分布を図表にまとめると、以下のようである。

図表1 日韓の「中途終了文」の丁寧度の分布



日本語の「中途終了文」の丁寧度は中間程度で、韓国語の「中途終了文」は非常に低い。韓国語の「中途終了文」である f には尊敬の意を表す終結補助詞「요」(yo)が文末についているにもか



かわらず、丁寧度は非常に低く評価されたのである。従って、fのような韓国語の「中途終了文」の丁寧度はかなり低いと考えられる。

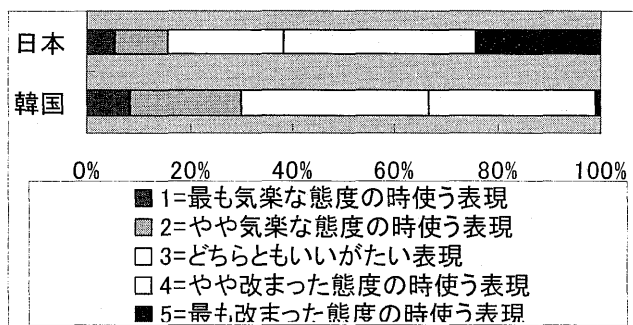
#### 4.2.2 友達に対する場面

表4 各表現の丁寧度の平均値

		C	D	G	J	K	L
日本	丁寧度	2.402	1.945	<b>2.759</b>	1.811	1.55	2.24
韓国	丁寧度	2.792	2.44	<b>1.821</b>	2.667	1.945	3.417

このうち、「中途終了文」(g)の丁寧度の分布を図表にまとめると、以下のようになる。

図表2 日韓の「中途終了文」の丁寧度の分布



日本語の「中途終了文」の丁寧度は、友達に対する場面においては、最も高いことが分かる。韓国語の「中途終了文」は丁寧度は最も低いという点は改めて確認できた。そのため、韓国語では「中途終了文」の丁寧度がかなり低いと考えられる。場面(1)の「中途終了文」であるfの丁寧度も最も低いことから裏付けられると言える。

## 5. まとめ

ここでは、「断り表現の使用実態」と、「断わり表現の丁寧度」の調査結果をまとめて示す。

まず、「断り表現の使用実態」の調査結果についてみると、日本語と韓国語の回答文における「中途終了文」の割合は20%~30%程度であるが、場面別の使用頻度には差が少し見られる。日本語

の「中途終了文」の場合、疎の教授に対する場面②<sup>1</sup>での使用頻度が最も高く、疎の友達に対する場面での使用頻度は低い方である。親に対する場面③での使用頻度は低い方である。これに対して、韓国語の場合、親の教官と疎の教官との間には使用頻度の差は大きくないが、親友と疎の友人との間の使用頻度の差が大きい傾向が見られる。親に対する場面③での使用頻度は、日本と同様最も低い。

次は「断わり表現の丁寧度」の調査結果についてみると、日本語の「中途終了文」の場合、教授に対する場面での丁寧度は中間程度であり、友達に対する場面では高いことが分かる。韓国語の「中途終了文」は教授と友達に対する場面での丁寧度は非常に低い。

ところが、親に対する場面での使用頻度が非常に低いという点は共通しているが、日本語の「中途終了文」の丁寧度は高い方で、韓国語の「中途終了文」の丁寧度は非常に低いという丁寧度における相違点が認められる。なぜこのような現象が生じるのであろうか。この疑問点は今後の課題にしたい。

## 6. 今後の課題

- ①丁寧度の調査においては限られた表現のリストから選ばれた表現を中心に考察したが、今後は他のいろいろな形の「中途終了文」を調査したい。
- ②今後は断り以外の場面、例えば、依頼、提供、勧誘、忠告などの場面における、日韓の「中途終了文」についても考察したい。
- ③語用論的ルールとの関わりからの分析は、今後さらなる検討が必要であろう。

---

<sup>1</sup> 省略されるべき要素は、言語的、或は非言語的文脈から、復元可能 (recoverable) でなければならない。p.8

<sup>2</sup> 省略は、より新しい(より重要な)インフォメーションを表す要素を省略して、より古い(より重要度の低い)インフォメーションを表す要素を残すことはできない。pp.15-16

<sup>3</sup> 本稿では、断わる場面における「中途終了文」を考察する際、話し手と聞き手との関係、丁寧度などを考慮して語用論的な分析を行う。

<sup>4</sup> 調査は1998年7月と9月に、日本人大学生・大学院生124人、韓人大学生・大学院生152人を対象に行った。

<sup>5</sup> (1)오늘은 몸이 좀 안좋은데요. 例文(1)の[-은데]は連結語尾であり、類似表現として日本語の「が」が挙げられる。韓国語の文の終結法は終結語尾の付け方によって決まると言われるので、文の終結は終結補助詞によるものではないと思われる。本研究では、接続語尾に終結補助詞の「요」(yo)のつく文を「中途終了文」と考える立場をとる。

<sup>6</sup> ここでは、完全に言いきらない文という意味として使っている。

<sup>7</sup> 本稿のp5を参照。

## 参考文献

生駒知子・志村明彦(1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：「断り」という発話行為について」『日本語教育』79号

久野 暉(1978)『談話の文法』大修館書店

志村明彦(1993)「断り」という発話行為の中における待遇表現としての省略の頻度・機能・構造に関する中間言語語用論研究『平成5年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会

白川博之(1990)「テ形」による言いさしの文について『広島大学日本語教育学科紀要』創刊号  
pp.39-48

(1991)「から」で言いさす文『広島大学教育学部紀要』第2部 第39号 pp.249-255

(1995)「タラ形・レバ形で言いさす文」『広島大学日本語教育学科紀要』5 pp.33-41

福田嘉子(1994)「話し言葉における文末表現の研究－「けれども」で言い終わる文を中心に」広島大学大学院修士論文

水谷信子(1991)「待遇表現指導の方法」『日本語教育』69号 pp.24-35

Brown P & S D Levinson(1978) Politeness, Some Universals in Language Usage, *Cambridge University Press NY*.

Geoffrey N.Leech(1983) PRINCIPLES OF PRAGMATICS 池上嘉彦・河上誓作訳 『語用論』紀伊国屋書店(1987)

Jacob L.Mey(1993)Pragmatics (澤田治美・高司正夫訳『ことばは世界とどうかわるか』

---

1996, ひつじ書房)

Lakoff, Robin 1973. "The Logic of Politeness; or, Minding Your P's and q's" In paper from *the ninth regional meeting of the Chicago Linguistic Society*.

Lakoff, Robin 1980. "Psychoanalytic discourse and ordinary conversation." In Shuy and Shnukal, eds., *Language Use and the Uses of Language*, 268-269.

김 옥(1998) 「국어 접속문의 생략에 대한 고찰」 (A Study on the Ellipsis in Conjunctive Sentence in Korean) 全南大学校教育大学院修士論文

남기심 고영근(1988) 『표준국어문법론』 탐출판사

元 智恩(1999) 「日韓言語行動の対照研究－断り行動のモデル化をめざして－」 『第3回社会言語科学会研究大会予稿集』 社会言語科学会 pp.43-48

南 美貞 (1999) 「接続語尾－거든의 通時的的研究」 西江大学校大学院国語国文学科修士論文

박재연(1998) 「현대국어 반말체 종결어미」 서울대학교대학원 국어국문학과 박사논문